心に小さな灯りがともった

わたしは、学校で友だちと話をしたり、休み時間に遊んだりすることが毎日の楽しみだった。そんな仲のよかった友だちが、２週間ほど前、わたしからはなれて行った。でも、わたしにはその理由がわからなかった。

登校すると、くつ箱に上ぐつがない日があった。

机の場所が変わっている日もあった。

休み時間に、一人ぼっちで過ごす日もあった。

ある日、教室にわたしの悪口が書かれたメモが落ちていた。そのメモを拾って読むわたしを見て、何人かが笑っていた。

こんな日が続いて、わたしは、悲しくて学校に行くことがとてもいやだった。

でも、だれにも相談することができなかった。

今日、わたしが休み時間に一人ぼっちで教室にいると、ゆり子さんがそっと近づいて来て、

「だいじょうぶ？」

とわたしに声をかけてくれた。

さやかさんも、学校からの帰り道、わたしを追いかけてきて、

「知らん顔をしていて、ごめんね。」

と言ってくれた。

わたしは、その言葉を聞いて、なみだがあふれてとまらなかった。

わたしの心に小さな灯りがともったように思えた。